

1 1	海部	愛西市立佐織西中学校	セノオ リオ
			名前 妹 尾 梨 央

分科会番号	3	分科会名	社会科教育（中学校）
-------	---	------	------------

研究題目

生徒一人ひとりが主体的に取り組み、楽しさと充実感が味わえる社会科学学習
—学び合いの活動を通じて—

研究要項

1 はじめに

近年、平成 29 年告示の学習指導要領（中学校は令和 3 年度より全面実施）において、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。特に社会科においては、知識の習得にとどまらず、社会的事象を多面的・多角的に捉え、自ら考える力を育成することが重要である。しかし、実際の授業においては、知識の定着を重視した教師主導の説明が中心となることが多く、生徒同士の関わりが十分に生かされていない場面も見られる。

本研究は、第 1 学年の 3 学級を対象に実施していく。生徒の多くは、社会科の学習に対して、意欲的に取り組んでいる。しかし、事前に行ったアンケート（対象生徒 77 名）の「あなたは社会科の授業で、自分の意見を相手に伝えることは得意ですか」という問いに対して、「得意」「どちらかといえば得意」と回答した生徒は、全体の 27%にとどまった。その理由としては、「もし自分の意見が間違っていたら不安」「自分の意見に自信がない」「自分の意見を否定されると悲しい」と、自らの意見に自信がないため、相手に意見を伝えるのが難しいと感じていることが分かった。

本研究では、地理的分野の単元「世界各地の人々の生活と環境」を取り扱う。この単元では、世界の人々の生活背景を通して世界各地の多様性を学習する。各地域の主食となる農産物やそれらが生産されている場所や気候、その地域に暮らす人々の服装や住んでいる住居に注目させ、人と自然との関わりについて学習していく。そのうえで、自らの人と自然との関わりについて、調査、考察を加えることで、自分自身の日常生活が、自然との関わりの中で成立していることに気付かせ、自分の住む地域を自然と関わりながら活性化させていくことについて主体的に探究できると考えた。

そこで本研究では、「世界各地の人々の生活と環境」の単元において、学び合い活動を取り入れたグループ活動の充実を図るとともに、教師の適切な支援を組み合わせることで、生徒の主体的な学びと知識の定着の両立を目指す。そして、本実践を通して、社会科における効果的な学び合い活動の在り方について考察する。

2 研究仮説

- ① 生徒の生活に根ざした地域社会と関連付けた学習活動を行うことで、社会的事象を多面的・多角的に捉えることのできる生徒が育つであろう。
- ② 興味・関心をもって学ぶための授業構想を工夫し、その中に、学び合い活動を設定することで、生徒一人ひとりが主体的に取り組み、協働学習の中で自己有用感と学びを深める楽しさを実感できる生徒が育つであろう。

3 研究方法

(1) 手立て①（課題設定の工夫）

社会的事象を多面的・多角的に捉えるという社会科固有の見方・考え方に着目し、既有知識と新情報のギャップに焦点を当てた学習課題を設定することで、学ぶことを楽しむ姿勢を育てる。

(2) 手立て②（グループ活動の充実）

生徒一人一人が主体的に活動に参加できるよう、ジグソー学習を取り入れる。調べ学習では「エ

キスパート」としての役割を明確にし、話し合いの視点を示すとともに、考えの共有・比較の際には活動時間を区切って設定することで、全員が自分の考えに自信をもって活動に参加できるようにする。これにより、自己有用感を高め、他者との関わりを通して考えを広げ、深める態度を育てる。

(3) 手立て③（ICT 機器の活用）

タブレット端末を用い、情報収集だけでなく、思考の途中経過をリアルタイムで共有させ、他者の論理展開を参照すべきリソースとして可視化することで、生徒自らが思考を修正し深化させて学習の質を高める。

4 研究対象 中学校 1 年生

5 単元 世界各地の人々の生活と環境（9 時間完了）

6 単元のねらい

- (1) 世界各地の人々の生活の様子とその変容や環境の多様性を、自然的条件や社会的条件と関連付けて理解することができる。 （知識・技能）
- (2) 世界各地の人々の生活の様子と環境の多様性を、自然的条件や社会的条件と関連付けて考察し、その過程や結果を適切に表現している。 （思考・判断・表現）
- (3) 世界各地の人々の生活の様子と環境の多様性に対する関心を高め、それを身近な課題と関連付けて追究しようとしている。 （主体的に学習に取り組む態度）

7 単元計画

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準
1	課題を確認し、世界の気候を予想しよう - 愛知県が魅力度ランキング 1 位をとるために必要なことを考える。 6 つの気候区分の写真を見て、その写真が世界のどのあたりで撮られたか考える。 6 つの気候区分の食事について調べ、まとめる。	2025 年度の全国魅力度ランキングで愛知県が 16 位（前年度 20 位）であったことを提示し、順位を上げるための方法の一つとして、愛知県の「名産」を生み出すことに気付かせる。 6 つの気候区分の写真と世界地図を紙媒体で配付し、グループで話し合い、それぞれの写真の撮影地を予想して地図上に貼らせる。	主 世界各地の自然環境や食事の特色について意欲的に考えようとしている。 （観察）
世界各地の気候と人々の関わりのお宝を探ろう			
2	暑い地域に生きる人々を知ろう - マレーシアの先住民オラン・アスリの自然に適応した生活について理解し、日本の生活と比較する。 - 現代における、先住民の生活の変化について考える。	- オラン・アスリと日本の住居との違いや高床の理由など、視点を指定して考えさせる。 - 熱帯気候の特徴を踏まえ、オラン・アスリの主食とその理由についてグループで考えさせ、タブレット端末上でレポートにまとめさせる。	思 暑い地域での暮らしを住居や食事から読み取ることができる。 （タブレット端末）
3	乾燥地域に生きる人々を知ろう - モンゴルの遊牧民の自然に適応した生活について理解し、日本の生活と比較する。 - 遊牧民の生活の変容とその影響について考える。	- 遊牧民の伝統的住居ゲルと日本の住居との違いや簡素なつくりの理由など、視点を指定して考えさせる。 - 乾燥帯気候の特徴を踏まえて、遊牧民の主食とその理由についてグループで考えさせ、タブレット端末上でレポートにまとめさせる。	知 乾燥地域では植物が生育しづらいため、その自然環境に適した農業が行われていることを理解できる。 （レポート）
4	温暖な地域に生きる人々を知ろう - イタリアに住む人々の自然に適応した生活について理解し、日本の生活と比較する。 - イタリアと日本の主食の違いについて考える。	- イタリアの石造りの住居と日本の住居との違いや、住居が石造りである理由など、視点を指定して考えさせる。 - グループ内で役割を設定し、イタリアと日本の主食の違いを調べ、タブレット端末上でレポートにまとめさせる。	知 イタリアと日本の主食の違いについて、自然環境と関連付けて理解することができる。 （ワークシート）
5	寒い地域に生きる人々を知ろう - イヌイットの自然に適応した生活について理解し、日本の生活と比較する。 - 植物が育たない気候での人々の食事について考える。	- イヌイットの住居イグルーと日本の住居との違いや材質が雪である理由など、視点を指定して考えさせる。 - 冷帯・寒帯気候の特徴を踏まえ、イヌイットの主食とその理由についてグループで考えさせ、タブレット端末上でレポートにまとめさせる。	思 イヌイットがどのようにして自然に適応して生活しているか、食事などの面から説明することができる。 （レポート）

6	高地に生きる人々を知ろう ・ 高地で生きる人々の自然に適応した生活について理解し、日本の生活と比較する。 ・ 標高によって栽培する農作物が変わることを理解する。	・ アンデス山脈で生活する人々の服装と日本の服装との違いや重ね着をする理由など、視点を指定して考えさせる。 ・ 気候の特徴を踏まえ、高地での主食とその理由についてグループで考えさせ、タブレット端末上でレポートにまとめる。	知 標高によって気温や栽培する農作物が変化することについて理解することができる。 (ワークシート)
7	さまざまな宗教と人々の生活 ・ 世界の宗教と人々の生活のつながりを理解し、その特色を社会的条件と関連付けて考察する。	・ 宗教が日常生活のよりどころとなっていることや、グローバル化など社会の変化によって宗教も変容していることに気付かせる。	思 世界の宗教と人々の生活とのつながりや、宗教の変容を考察することができる。 (レポート)
8	愛知県の新たな名産を考えよう ・ 自然との関わりを踏まえ、愛知県の魅力を高める新たな名産品について考える。	・ 愛知県の気候や自然環境について調べさせ、自然環境に適した新たな名産品について考え、タブレット端末上でプレゼンテーション資料を作成させる。	主 愛知県をより魅力的にするため、愛知県の自然に適した名産を考え、興味を深めようとしている。 (レポート)
9	愛知県の魅力を広めよう ・ 自身が考えた愛知県の自然に適する名産をグループ内で紹介し、考えを深める。	・ 前時に作成した資料を使って、グループ内で愛知県の新名産について発表を行わせ、お互いに評価させる。 ・ これまで学んだことをもとに、自然環境と人々の生活の関わりについて振り返りをさせる。	主 愛知県の新名産をグループ内で共有し、自然環境に合った生活が身近に行われていることを理解し、関心を深めようとしている。 (観察)

8 抽出生徒

生徒A	生徒B
社会科の授業に対して意欲的であり、学習にまじめに取り組むことができる。しかし、事前アンケートの結果から、社会科を「暗記科目」として捉えており、統計データや資料から情報を読み取ったり、課題を追究したりすることに苦手意識をもっている。 本実践で、タブレット端末を用いて、データや統計資料の読み取りを通して、多面的・多角的に社会的現象を深く理解できるよう支援していく。	社会科の学習への苦手意識が強く、知識の定着が不十分である。また、事前アンケートの結果から、社会科の授業の中で、自分の意見を伝えることに対して、「自分の意見に自信がなく、間違えたときに怖い」と苦手意識をもっている。 本実践で、グループでの意見交換を通じ、他者と協働して学びを深める楽しさを感じられるように支援していく。

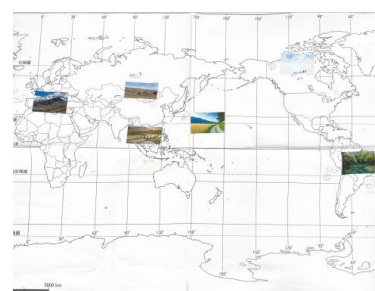
9 実際の研究

【第1時】 課題を確認し、世界の気候を予想しよう

本研究では、世界各地の気候と人々の生活の関わりについて調査、考察を加えて学習することで、自分自身の日常生活も自然との関わりの中で成立していることに気付かせる。その上で、単元のまとめとして自身の住む愛知県という地域を、自然と関わりながら活性化させていくことについて主体的に探究させていく。そのため、本単元の導入で、「愛知県を魅力度ランキング1位にするには？」という問いを提示した。「地域ブランド調査 都道府県魅力度ランキング(2025)」において、愛知県が16位(前年20位)であることを示しつつ、生徒に魅力度ランキング上位の各都道府県の名産品についてインターネットを活用して調べさせた。クラス全体での情報の共有を通して、ランキング上位の各都道府県には「自然的条件を生かした名産品」があることに着目させた。そして、本単元では世界各地の気候と人々の生活の関わりについて学び、まとめとして「愛知県の魅力度を上げることができる、気候を生かした名産品の提案」を行うことを生徒に伝え、学習の見通しをもたせた。

気候と人々の生活との関わりを考える導入では、生徒にタブレット端末上で6つの気候帯を代表する国々(日本、マレーシア、モンゴル、イタリア、アメリカ・アラスカ州、ボリビア)の写真と世界地図を提示した。生徒には、写真に「#(ハッシュタグ)」を付けさせ、写真を見て感じた第一印象を一言で表現させた。第1時において、6つの気候帯を代表する国々の写真に対する第一印象を生徒から引き出すことで、その情報をもとに教師が生徒のもつ既有知識を可視化する資料を各授業前に作成することができた。作成した各資料が、「既有知識と新情報のギャップ」を生み出すひとつの手がかりとなり、生徒に学ぶことの楽しさを感じさせることができた。

その後グループになり、各グループに世界地図と6枚の写真を配付した。各グループは話し合い活動を通して、写真が撮影された地域の予想とその理由を考え、世界地図に写真を貼り付けるマッピング活動を行った【資料1】。緯度・経度のみ表示があり、国名や地形情報が記載されていない白地図を用いることで、「雪があるから寒そうである。寒いということは北の方ではないか」というような生徒の既有知



【資料1】生徒が予想した世界地図

識を呼び起こさせた。実際に、世界地図へのマッピング活動では、「田んぼが広がっているから日本だと思う」「砂漠が広がっているので、海からは遠いのではないか」など、視覚情報と既有知識を統合した活発な議論が展開された。

最後に、6つの地域の伝統料理について、グループ内で生徒それぞれに調べる国を指定して役割をもたせて調べ学習を行わせ、同じ国を調べた仲間が集まって情報をまとめた。その後、最初のグループに戻り、料理に使われる食材を世界地図の中に記入した。第1時において、各地域の伝統料理についてジグソー学習を用いて調べ、その情報を生徒の既有知識として定着させることで、各授業で行う「食と自然環境の関わり」についてのレポート作成に、考えることが苦手な生徒でも取り掛かりやすくなるようにした。また、各授業において、第1時で調べた伝統料理について紹介することで、「私が調べてまとめた内容が、授業で取り上げられている」という役割を全うする中で得られる自己有用感を高める工夫をした。

【第2～7時】各地域に生きる人々を知ろう

第2～7時では、「課題設定—エキスパート役割による調べ学習—課題解決」の流れで、授業を実践した。授業では毎時の導入で、日本と学習する地域を比較するクイズを提示し、既有知識である日本と新たな地域の特徴を比較することで、生徒の知的好奇心を引き出す課題設定を行った。その際、比較が明確になるように、それぞれ視点を与えた。例えば第3時では、日本とモンゴルの住居を比較し、生徒の意見をもとに「なぜモンゴルの住居はテント式なのか」という課題を設定した。生徒自らが課題を見つけ設定することの前段階として、生徒の意見をもとに毎時間課題設定を行った。その後、モンゴルの遊牧民について、「仕事」または「食事」のエキスパート役割を生徒に与えて調べ学習を行い、日本とモンゴルの雨温図を比較することで、気候の違いと生活との関わりについて考えを深めた【資料2】。最後に、気候的根拠をもとに課題を解決する活動を行った。

第4時では、イタリアの生活に着目させた。導入では、日本とイタリアの住居を比較するクイズを行い、生徒の「イタリアは石造り」「窓が小さい」といった意見をもとに、「なぜイタリアの住居は石造りなのか」という課題を設定した。また、第1時に提示したイタリアの小麦畑の写真について、「日本の田んぼとの混同」という生徒の第一印象をテキストマイニングで可視化・共有した後、それがイタリアの風景であることを示し、日本との主食の違いに着目させた【資料3】。

その後、隣同士でペアを組み、一人は「日本」、もう一人は「イタリア」を担当するエキスパート役割を設定し、「食」と「気候」の視点で調べ学習を行った。情報交換を通して、気候の違いが主食の違いにつながっていることを、導き出すことができた。また、各個人にエキスパート役割を与え、注目すべき視点を提示することで、自らが行うべき活動が明確になり、タブレット端末や教科書等の資料を用いて積極的に調べ学習を行い、自らの役割を果たそうとする生徒の姿が多く見られた。

次に、温帯の特徴を踏まえ、「イタリアで石造りの住居が建てられる理由」を考えさせた。個人で考えた後、タブレット端末を用いて考えを全体で共有させ、改めて自身の考えを見直させた。生徒Aは「樹木が育ちにくい環境のため、石を使う」という考えに加え、「石は熱を通しにくく、夏の暑さを和らげる」という他者の視点を取り入れ、自分の考えを深めることができた。このように、タブレット端末を用いた他者参照をリアルタイムで行うことで、生徒が思考を修正し深化させようとする姿が見られた。

最後に、伝統料理であるピザを題材にレポートを作成した。当初は主食である小麦に着目させる予定であったが、ペア学習を通して気候と食との関連を捉えたことで、トマトやオリーブなどの乾燥した気候に適した作物にも着目し、教師の想像を超えて、気候風土と食文化との関わりを、根拠をもって整理することができた。

第5時では、アメリカ・アラスカ州（バロー）の先住民イヌイットの生活に着目させた。導入では、日本とアラスカ州の住居を比較するクイズを行い、生徒の「アラスカ州の住居は雪造り」「かまくらみたい」といった意見をもとに、「なぜ、アラスカ州の住居は雪造りなのか」という課題を設定した。

モンゴルの遊牧民の伝統的な生活を探れ!!

調べる人	調べる内容
生徒 B	【モンゴルの遊牧民は、どのような仕事をして生計を立てているだろうか?】 牧畜業 ノマドワーク 羊 馬 牛 山羊 牛乳
生徒 A	【モンゴルの遊牧民は、どのようなものを食べているだろうか?】 家畜から得られる肉と新鮮な野菜 白い食べ物 赤い食べ物

【資料2】遊牧民についての調べ学習のまとめ



【資料3】テキストマイニングを使用して
可視化した生徒の意見

まず、世界地図からイヌイットが生活する地域を確認させ、赤道から離れているため気温が低いことを捉えさせた。

そして、生徒にそれぞれに「伝統」「現代」というエキスパート役割を与え、イヌイットの生活を調べさせ、情報交換を通して知識を統合させた。イヌイットの伝統的な生活について調べた生徒Bは、かつての「アザラシを狩猟する移動生活」に注目した上で、ペア学習を通して、現代は「定住生活の中で狩りを行う生活」へと変化しながらも「狩猟が継続していること」に疑問を抱いた。そこから、雨温図の読み取りを通して寒冷な気候であることに着目し、農作物が育ちにくいいため、現在もアザラシの狩猟が必要であると考えることができた。エキスパート役割を与えた上でペア学習を行うことで、当初は意見交流に対して消極的であった生徒Bが、自らの意見に自信をもって話し合い活動に参加し、他者との関わりを通じて、考えを広げ、深める姿が見られた。

最後に、「イヌイットが雪造りの家を建てた理由」について個人で考え、タブレット端末上でお互いの意見を交流させた。生徒Bは当初、「狩りのための仮住まい」という機能面に着目していたが、タブレット端末を用いたリアルタイムでの他者参照により、「寒冷なため樹木が育てられず、建築材料として雪を利用した」という気候的要因を加え、多面的に考えることができた。

【第8・9時】愛知県の新たな名産を考え、魅力を広めよう

第7時までに、世界の各地域の主食となる農産物や、それらが生産されている場所や気候、その地域に暮らす人々の服装や住んでいる住居に注目させ、人と自然との関わりについて学習してきた。その上で、自分の住む地域を自然と関わりながら活性化させていくことについて主体的に探究させることで、自分自身の日常生活が自然との関わりの中で成立していることに気付き、生徒一人一人が楽しさと充実感を味わいながら学習できるのではないかと考えた。



【資料4】発表会の様子

第8時では、これまで学習した世界各地の気候や自然環境と人々の生活の関わりをもとに、「愛知県が魅力度ランキング1位であるための新たな名産品」について考える活動を行った。生徒には愛知県内の市町村を1つ選び、これまでの学習を振り返りながら、その市町村の気候や自然環境の特徴を整理し、それらを生かした新たな名産品を構想させた。生徒は、世界各地の事例と比較しながら、自分なりの根拠を整理し、提案する名産品の特徴や気候・自然環境との関連、期待される効果について、タブレット端末上でプレゼンテーション資料を作成した。

第9時では、前時に作成したプレゼンテーション資料を用いて、4人グループで愛知県の新たな名産品について発表を行った【資料4】。発表では、名産品の特徴だけでなく、「新名産品が愛知県の気候や自然環境をどのように生かしているか」という根拠を明確に示すように伝えた。聞き手は相互評価シートを用いて、「地域の気候を生かした新名産品を提案できているか」「根拠（資料・データなど）があり、説得力があるか」などの5項目（各5点満点）で評価を行った。そして総合評価として、「あなたが『市長』なら、この新名産を商品化したいか」という問いを設定し、その理由とともにまとめさせた。実際に、生徒Aは「美浜町の温暖で、冬にも霜がおりづらいという気候の特色を生かした、花卉（かき）の花束・ブーケづくり」、生徒Bは「一宮市の夏に蒸し暑く降水量が多いという気候の特色を生かした、ナス料理のイベント」を提案した【資料5・6】。

生徒Aの発表に対して、評価者である生徒からは、「美浜町の温暖で日照時間が長いという特色を利用しており、地域の気候を生かすことができている」、「ブーケづくり体験を行うことで、花の生産者の思いも知ることができる」という生徒Aの発表にはなかった生産者からの視点の意見が聞かれ、すべての評価者が「私が市長ならば、この新名産品を商品化したい」と評価した。発表会を通して、生徒は互いの考えを聞くことで、自分にはなかった視点に気付き、提案内容をより多面的に捉える姿が見られた。

美浜町の名産品

花卉（かき）



新しい名産品

花束・ブーケ作り

美浜 黒潮の影響を強く受けるため県内でも特に温暖な地域で冬でも霜が降りにくく花卉が育ちやすい。
そこで花卉や他のお花を使って花束やブーケ作りの体験を提案する。花束やブーケ作りの体験をすることでお花に興味を持ってもらえたり家族などの人たちに日頃の感謝を伝えることができるのではないかと考える。

【資料5】生徒Aの発表資料

一宮市の名産品について

ナス：一宮はナスが育ちやすい環境にあるためナスが多く作られている

体験事業「ナスの料理をたくさん作るイベント」

【新・名産品について】
・ナスを嫌いな人が多い
↓
・ナスを買う人が少ない
↓
・このイベントをする
↓
・様々な人がナスの魅力を知りナスを多く買ってもらえるかもしれない

※ 月に一度一宮でナスを使った料理をたくさん出すイベントを行う（無料）



【資料6】生徒Bの発表資料

10 仮説の検証

仮説①②を検証するため、3つの手立てを設定し、授業実践における生徒の様子や事後アンケートの結果を基に検証した。

(1) 手立て①（課題設定の工夫）

本単元を通して、授業の導入で、日本と学習する地域の「住居」や「衣服」を比較し、「なぜ、その住居や服装が選ばれるのか」という課題について予想を立てさせた。その後、気候の特徴や気候に即して生活する人々の姿について学習することで、「気候的特徴」という根拠をもって課題に対する答えを導きださせた。事後アンケートでは、導入におけるクイズ形式の問いへの満足度は99%であり、既有知識と新情報のギャップを提示する「課題設定の工夫」が生徒の知的好奇心を高め、主体的な学びにつながったと考える。また、学習した世界各地の事例を愛知県の自然環境の特色と関連付けて考察することで、これまで知っていると思っていた地元・愛知を「気候」という新たな視点から考えることになり、社会的事象を多面的・多角的に捉える姿も見られた。

(2) 手立て②（グループ活動の充実）

本単元を通して、グループ活動において「役割を明確にすること」「話し合いの視点を示すこと」「お互いの考えを共有・比較すること」を手立てとして取り入れた。役割設定（エキスパート役割）による参加のしやすさについては、「自分の責任を果たしたい」「役割があると嬉しい」と、86%の生徒が肯定的な回答をした。特に、事前調査では自信のなかった生徒Bが「役割があると何を考えるかわかりやすい」と記述した点においては、役割設定を行うことが生徒の自己有用感を内発的に高める機能をもつことを示唆している。また、単元の終わりに行った、愛知県の新名産品についてのグループ内発表では、互いの発表をよく聞いて、視点を意識した相互評価、意見交流が活発に行われた。仲間の発表を聞くことで、自身にはなかった視点や考えに気づき、自己調整学習を行おうとする姿が見られた。

(3) 手立て③（ICT機器の活用）

本単元を通して行った、タブレット端末を用いた他者参照は、思考の修正と深化を支える機能を果たした。第4時において生徒Aが他者の「石の特性」に関する記述を自身の考えに取り入れたことは、タブレット端末が単なる検索ツールではなく、他者の思考を自らの論理構造に組み込むための媒体となったことを表している。

以上のことから、3つの手立ては、生徒の多面的・多角的な思考や主体的な学び、協働して学ぶ楽しさの実感につながったと考える。よって、仮説①②は一定程度立証されたと考える。

11 成果と課題

学び合い活動を取り入れたグループ活動を通して、仲間とともに主体的に学習する姿が多く見られた。事後アンケートでは、「本単元を通して、自分の意見を相手に伝えることが得意になったか」という問いに対し、65%の生徒が「得意になった」「どちらかといえば得意になった」と回答した。事前アンケートの27%から大きく増加しており、明確な役割設定や協働学習による情報の相互作用が、意見発信への自信を高めたと考えられる。また、タブレット端末を活用した情報収集やレポートの共有を通して、考えを整理・表現し、互いの考えを比較しながら理解を深めることができた。

本研究の成果は、授業外の場面でも示された。給食時の放送で、「トウガン」の産地（1位沖縄、2位愛知）が紹介された際、生徒が「沖縄と愛知の気候の共通点は？」「なぜ、『冬』の『瓜』と書くのか」と自発的に問いを立て、思考を広げていた。授業で培った「気候と生活を結びつける視点」が日常生活でも表出したことは、本研究の成果である。

一方で、探究活動を重視したことで、個の学びへの還元に課題が残った。他者が調べた情報を十分に理解しないまま活動が進む場面も見られたため、今後は協働の成果を自分の言葉で整理し、知識として定着させるための個別の内省時間を充実させる必要がある。今後も、得られた成果と課題を改善しながら研究を進めていきたい。